

調査報告 6

パジャジャラン大学を訪問して

中村学園大学 流通科学部

中 村 芳 生

1. はじめに

2013年8月18日～22日、インドネシアの首都ジャカルタ、西ジャワ州都バンドンを訪問した。8月20日夕刻、ジャカルタでのスケジュールを終えた私たち一行は、バンドンのパジャジャラン大学訪問のため、ジャカルターチカンベック間高速道路を一路、東に向かった。道路事情の良いときにはバンドンまで2時間で移動できると言われているが、生憎、通勤ラッシュに巻き込まれ、4時間近くの移動となった。途中、トイレ休憩のために立ち寄ったサービスエリアには、コンビニのローソンがあり、中をのぞいてみた。商品はほとんどがインドネシア製であるが、サンドイッチや弁当類も置かれており、レジ横ではおでんが売られていた。店の外にテーブルとイスが用意されており、中年のカップルがおでんをおいしそうに食べていたのが印象的であった。

西ジャワ州の州都バンドンはジャカルタの南東140キロに位置し、標高約700メートルの高原都市である。平均気温は一年を通して最高気温が約27度、最低気温が約17度と過ごしやすく、大小合わせて30以上の高等教育機関が集まる学園都市として有名である。

翌8月21日午前、我々はインドネシアでも名門校として有名な国立パジャジャラン大学を訪問した。以下、概要を報告する。

2. 大学の概要

パジャジャラン大学は、同国でも有数の国立総合大学である。創立は1957年9月11日。初代学長は、独立運動指導者として著名なイワ・クスマ・スマントリ。初代大統領スカルノの10月1日付け大統領令により学長に任ぜられ、11月6日に首都ジャカルタの大統領宮殿にて宣誓式が執り行われている。



出所：西ジャワ州政府ホームページ
(<http://www.jabarprov.go.id/jabar/files>)

バンドンは、1955年のアジア・アフリカ会議の開催地として有名である。第二次世界大戦後、欧米諸国の支配下からアジア・アフリカ諸国の独立が続き、また米・ソによる東西冷戦の続く中、反植民地主義、東西いずれにも属さない第三の立場を貫こうと、アジア・アフリカの29か国から国家元首が集結した会議である。

パジャジャラン大学は、この会議の開催を契機に、バンドンに総合大学を設立しようとの強い熱意が地元並びに中央政府の中に生まれたことから誕生したとされる。

大学の名称「パジャジャラン」は、かつてこの地域を支配した王国の名であり、その王、シリワンギ王の名とともに西ジャワの人々の心に深く刻まれている。大学設立に向けた当時の関係者の熱い思いが大学名の由来からも伝わってくる。

創立当時は、法学部、経済学部、教育学部、医学部の4学部であったが、50～60年代にかけて11学部まで増え、21世紀に入り社会のニーズの多様化に対応する形で5学部を新設し、現在は16学部^(*)となっている。大学院（修士課程、博士課程）、職業専門教育（医学、歯学、看護、薬学、会計学）、スペシャリスト教育（眼科、神経科、口腔外科等医療系）なども設置される総合大学である。

2012年8月時点の学生数は、総数41,743人。内訳は、学部生29,395人、修士コース3,434人、博士コース1,790人、ディプロマ^(**)4,881人、その他職業系2,243人となっている。

留学生は医療系を中心に1,060人（大半がマレーシアから。インドネシア語コースに60名、うち日本人若干名）。

教員は1,831人（教授141人）、スタッフは1,628人である。

大学のキャンパスは、現在、バンドン市内のディパティ・ウクルと郊外のジャティナンゴールの2カ所である。元々は13か所に分かれていたが、日本の筑波研究学園都市構想に刺激を受

けた6代目の学長がキャンパスの統合を主導したとされ、83年以降、農学部を皮切りに順々と郊外のスメダン郡に所在するジャティナンゴール・キャンパス（177ha）に移転している。現在、法学部と経済・ビジネス学部、大学院課程をバンドン・キャンパスに残して、他の学部は移転が完了している。学長棟も2012年1月に完成し、移転済みである。

3. 副学長訪問

私たちは、まず学長棟のある Jatinangor キャンパスを訪問した。

予定の9時より若干早く到着したので、広いキャンパス内を移動しながら車中から建物や学生の様子を概観した。青色の小型バスやミニキャブで移動する生徒もいたが、バイクの利用者が多いようだ。

9時前に、副学長室を訪れた。対応して頂いたのは、Dr. med. Setiawan, dr. 副学長（Vice Rector）と経済学部からの Diana Sari, S.E, M.Mgt., Ph. D 国際部長（Director of International Affairs, Faculty of Economics and Business）であった。ちょうど同じ時間帯に経済学部の会合があり、学部長以下、メインのスタッフがバンドン・キャンパスから移動できなかったとのこと。

Setiawan 副学長からは、パジャジャラン大学の説明があり、Diana 部長からは経済・ビジネス学部について説明を受けた。その後、甲斐学長から中村学園について紹介を行った。

同大の文学部には、日本文学科があり、現在約800名の学生が在籍しているという。JICAから寄贈された日本語研究センターが彼らの学び舎である。海外での日本語学習者数は、近年増加の傾向にあり、国別でみた場合、インドネシアは中国に次ぎ第2位^(***)であるが、同大学で日本語を学ぶ学生が800名もいると聞いて正直、驚いた。

彼らの一部は卒業後、日系企業で働くことに

なるといわれており、将来、日本企業での就職に有利であることが日本語熱の高さの理由の一つになっているようだ。また、大学としても日本との交流には力を入れているようだ。

日本の提携大学として、千葉大学、関西学院大学、国際大学、大阪府立大学、群馬大学、名古屋大学、南山大学、広島大学、早稲田大学、天理大学などの名前が挙げられた。

1時間ほど副学長らと情報交換をした後、バンドン・キャンパスに移動し、そこで経済学部長以下のスタッフと情報交換を行った。

4. 経済・ビジネス学部訪問

車で40分ほどの距離にあるバンドン・キャンパスに移動して、経済学部長の Nury Effendi, S.E,M.A.,PhD (Dean)、Diana Sari 国際部長以下、Prof.Dr. H. Yuyus Suryana, S.E,M.S (Head of Master Program in Mangement)、Erie Febian, S.E,M.com.,PhD (Secretary of Management and Business Department)、Yudi Azis, PhD (Manager of International Affairs) らの先生方と交流をした。

経済・ビジネス学部は、大学創立当初の4学部のうちの一つで、会計学科、経済学科、経営・ビジネス学科の3学科とディプロマ課程で構成されている。

各学科は学士、修士、博士の各課程を有している。教員数は137名（うち、博士は49名、修士は86名、学士が2名）で、学生数は約7千名。

ディプロマ課程は、会計研究、マーケティング管理研究、税制研究、国際ビジネス研究の4プログラムあり、いずれも職業教育プログラムとして、3年間の履修期間終了後、卒業生がすぐに実際の業務に対応出来るよう色々な演習が準備されている。

学士課程は、会計研究、経済・開発研究、経営研究の3プログラムからなり、2008学年度以降、いずれもインドネシア語での講義に加え、英語コースも開講している。英語コースは、フィー

ルドスタディ以外はすべて英語で行われている。

専門職課程は、会計研究課程の修了者（経済学士）が会計士になるための特別な教育プログラムで本課程の修了者には会計士の学位が与えられる。

修士課程には、経済学、経営科学、経営管理、会計学、応用経済学の5プログラムが、博士課程には、会計学、経済学、経営管理の3プログラムがある。

なお、現在の名称は、経済・ビジネス学部となっている。これは、同学が目指す“ワールドクラスの大学”への取組みとの関連で、2011年8月26日付け学長令に基づき、変更されたものである。

私たちの滞在と同時期に、経済・ビジネス学部が主催する学生向けサマー・プログラムが行われていた。今夏が2年目になる同プログラムでは、昨年のテーマ「小規模企業（micro business）と起業家精神」を受けて、料理（culinary）とハンディクラフトのビジネス現場を現地で実際に見聞しながら小規模企業のマーケティングについて研修する6日間（8月19～24日）のコースで、日本からは千葉大学と九州大学から2名の学生が参加しているとの説明だった。

本プログラムの前後には、それぞれ2日間、4日間のバンドン観光、バリ観光がオプションとしてついている。海外からの参加費は、滞在費、食費、交通費等込で本プログラム\$300。プレ・ツアーとポスト・ツアーはそれぞれ\$100と\$220である。

5. 中村学園との交流の可能性

経済・ビジネス学部での講義はインドネシア語か英語ということで、本学学生の留学先としては、少しハードルが高いかもかもしれない。文学部には、外国人向けのインドネシア語コースがあり、日本からの短期留学生もいるとのことだが、外国学部か国際学部の学生が主である。本

学学生の研修プログラムとして考えると、昨年からスタートした経済・ビジネス学部主催のサマー・プログラムは、ある程度の英語力を有する流通科学部の学生であれば参加可能ではないか、と思われる。また、教員の相互交流として、短期の派遣、あるいは先方からの教員受入れも、こちらの準備次第で実現は可能であると思われる。

6. おわりに

中村学園大学流通科学部では、今年度からアジアビジネスコースが開設され、実際には、現在の1年生が2年生になる26年4月から各プログラムがスタートすることになっている。海外インターンシップ、海外ビジネス留学のプログラムを計画しており、提携先としての可能性を調査することも今回の訪問目的の一つとされていた。

パジャジャラン大学は、インドネシアで最初に日本文学を科目として取り入れ、かつ日本語教育に力を入れていることで有名である。大学としても日本の大学との提携には前向きな様子が伺われた。

また、経済・ビジネス学部には英語コースが開設されていることから、ある程度の英語力があり、ガッツある学生であれば、グローバル人材育成の場として他の東南アジアの有力大学とともに、派遣先の一つとして検討の余地はあると思われる。

今後、益々、日本との経済交流の進展が予想される東南アジアの大国であるインドネシアで学ぶことの意味は十分あると思われる。



(*)

医療科学系 5 学部 (医学部、歯学部、看護学部、薬学部、心理学部)

科学技術系 6 学部 (数学・自然科学部、農学部、畜産学部、漁業・海洋科学部、農産学部、地質学部)

社会・人文科学系 5 学部 (法学部、経済・ビジネス学部、社会・政治学部、人文科学部、コミュニケーション学部)

(**) 高等教育機関は学術的教育を行い、学位を出せる機関 (大学) と、専門的・職業的教育を行い、終了証書のみを出せる機関 (専門学校) の 2 つに区分される。専門的・職業的教育は就業年限によって、ディプロマ 1～4 の課程に分かれる。

(外務省[ODA]広報・資料 インドネシアにおける教育・人材開発の現状と改革の動向)

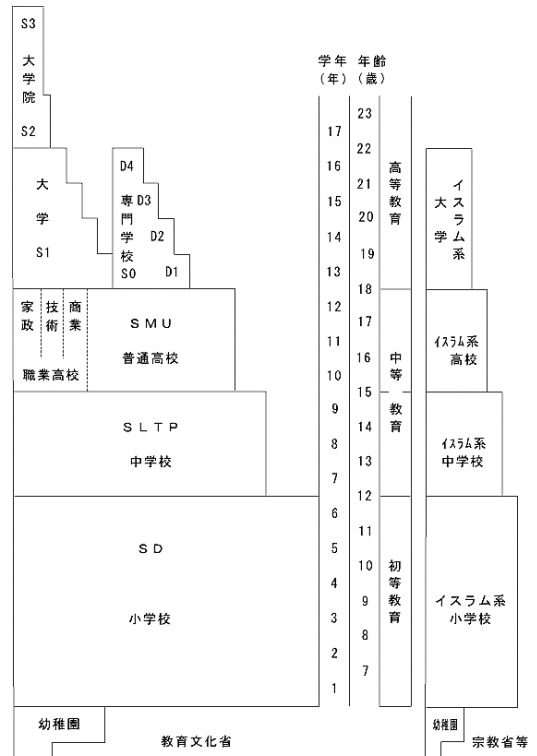
(***) 国際交流基金が 3 年に一度実施している「海外日本語教育機関調査」の 2012 年の結果によると、2012 年の日本語学習者数は、3,984,538 人 (前回より 9.1% 増) で、中国が 1,046,490 人 (同 26.5% 増) でトップ、第 2 位は 872,406 人 (同 21.8% 増) のインドネシア、第 3 位は 840,187 人 (同 12.8% 減) の韓国となった。韓国は 3 年前には 96 万人でトップだった。(国際交流基金 2013 年 7 月 8 日付け発表より)

web サイト

インドネシア大学公式サイト

<http://www.unpad.ac.id/en>

<インドネシアの教育制度>



出所：(外務省[ODA] 広報・資料インドネシアにおける教育・人材開発の現状と改革の動向)

参考文献

[Profile] Unpad 2012 Universitas

Padjadjaran

PADJADJARAN UNIVERSITY Academic Program 2012

外務省 [ODA] 広報、資料

インドネシアにおける教育・人材開発の現状と改革の動向